

第1回上映会

『アルナの子どもたち—

パレスチナ難民キャンプでの生と死』

(監督:ジュリアノ・メール・ハーミス、
2004年、イスラエル、日本語字幕84分)

日時:6月26日(金)16:30より開演

会場:成蹊大学8号館201教室(入場無料)

講師:田浪亜央江氏

(成蹊大学他非常勤講師)

『〈不在者〉たちのイスラエル』著者)

～いざないの言葉～

アジア太平洋。西はボスボラス海峡・スエズ運河から、東はアメリカ大陸西海岸まで。北にロシアやアラスカ、南にオセアニア・パタゴニアなどを含む。地球表面積の約半分を占めようかという、この広大な世界。そこでは自然が様々な姿形を織りなし、人々が多種多様な生を営む。この世界を彩るキー・ワードは、そう、「多様性」。しかしアジア太平洋とは、単に地理上の空間・文化圏のみを表す概念ではない。特に「極東」の縁(しま)に生きる者にとって、この世界は、自分たちの一部でありながら安易な理解を阻む、そんな不可思議なもの象徴なのだ。アジア太平洋が我々の心の中に呼び覚ますもの、それは、何かしら我々が自らの身体に対して抱く感情にも似ている。愛着並びにルサンチマン、悔恨、そして時には畏怖の念すら引き起こすもの。だがそうであるからこそ、この世界は、これまで気にも留めなかった「外なるもの」へと我々を激しく誘(いざない)、同時に「内なるもの」への(再)発見をも強く促してゆく。アジア太平洋の世界。それは我々がかつて体験し得なかったもの/感じ得なかったものへの出入り自由な扉、そして自由への扉そのものなのだ。

成蹊大学アジア太平洋研究センター(CAPS)主催 連続映画上映会

アジア太平洋の世界 —スクリーンの中の出会い—

成蹊大学アジア太平洋研究センター(CAPS)では今年度、そんなアジア太平洋世界を舞台とした映画の数々を上映していきます。皆様、月に一度行われる上映会に、どうか奮ってご参加ください(10月には、複数の映画を上映する「拡大上映会」も予定しております)。今後「子ども」「ジェンダー／セクシュアリティ」「環境」「音楽」など様々な角度から、アジア太平洋世界へと迫っていきます。また各上映会では映画内容にふさわしい専門家の方も随時お招きして、トークや講演会なども合わせて行います。そうして過ごされる数時間は皆様にとって、きっとかけがえのない時間となることでしょう。さあ、私たちと一緒に、アジア太平洋の世界に触れてみませんか？

◆次回予告◆

第2回上映会

『100人の子どもたちが列車を待っている』

(監督:イグナシオ・アグエーロ、1988年、チリ、日本語字幕58分)

日時:7月16日(木)16:30より開演

会場:成蹊大学4号館ホール(101教室)

講師:細谷広美氏(成蹊大学文学部教授)



ARNA'S CHILDREN
アルナの子どもたち
～パレスチナ難民キャンプでの生と死～

画像提供:NPO法人「パレスチナ子どものキャンペーン」

主催:成蹊大学アジア太平洋研究センター(CAPS)

〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

Tel: 0422-37-3549 Fax: 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

『アルナの子どもたち——パレスチナ難民キャンプでの生と死』

このドキュメンタリーは、占領と圧迫の中で、短い人生を燃やした青年たちへのオマージュであり、ユダヤ人とパレスチナ人の間に築かれた信頼関係と少年たちの友情の記録である。イスラエルや先進国の大人たちは彼らを「テロリスト」と呼ぶかもしれない。しかし彼らを追いつめているのは、私たちの沈黙ではないだろうか……。

もし、生まれる場所を自由に選ぶことができたのなら、彼らは今も笑っていたにちがいない。選択の余地のない人生を淡々と生きていく彼らの姿は、閉塞した世界と若者たち、そして今ある社会に共通するものがあるであろう。

◆ストーリー◆

イスラエルの平和運動家であったアルナ・メールは、1989年パレスチナのジェニン難民キャンプの中に「支援と学習」という子どもたちのための事業を開始した。1993年、オスロ合意と和平の機運のなかで、アルナはスウェーデン議会から「もうひとつのノーベル平和賞」を受賞する。この賞金をもとにキャンプに、子ども劇団が作られた。アルナとジュリアノは絶望や暴力が渦巻くキャンプの中で、演劇や絵画を通して、自由と夢、そして人としての権利を教えていこうとした。しかし、アルナの死と時を同じくして和平が破綻し、イスラエル軍からの激しい軍事進攻を受けるなか、青年となった彼らは厳しい現実と直面する……。

◆監督からのメッセージ◆

あるイスラエルの女子学生はこの映画を見終わったとき「驚きました。私はパレスチナ側にも、夢を持っていて、笑っていて、こんなにかわいい子どもたちがいるなんて全然知りませんでした。」と泣きながら言いました。彼女にとってパレスチナとは、いっさい人間的な存在ではなかったのです。笑って夢を語る子どもたちがいることすら想像できなかったのです。プロパガンダや政策によって、人々の心が閉ざされ、「敵」の顔や心を想像することもできない状況になっているのです。

[ジュリアノ・メール・ハーミス]

イスラエルの俳優、監督。ユダヤ人の母(アルナ)とパレスチナ人の父の間に生まれる。母が作った「子ども劇場」では演劇を指導した。2002年のイスラエル軍のジェニン侵攻後、劇団に参加していた子どもたちの安否を尋ねたことが、この作品を作るきっかけになった。2006年にジェニン難民キャンプで「子どもの自由劇場」を再開。

(NPO法人「パレスチナ子どものキャンペーン」のチラシより引用)

◆6～9月上映会のテーマ:「アジア太平洋世界に生きる子どもたち」◆

子どもたちは、何時でも何処でもまさに社会の鏡。6・7・9月の3度にわたって行われる上映会では、そんな子どもたちをテーマにした映画をお送りしていきます。アジア太平洋世界に生きる子どもたちは、それぞれの場所で、いかなる生を送っているのでしょうか。日本の子どもたちとは一味も二味も違った彼らの生き様を、どうかスクリーンを通してご覧ください。

◆講師紹介◆

田浪亜央江(たなみあおえ)

東京外国語大学アラビア語学科在学中の1994年から96年までのシリア留学中、この地に生きるパレスチナ難民の生活環境を知り、パレスチナ問題に関心を持つ。一橋大学言語社会研究科に入学後、エジプト、イラク、パレスチナ被占領地、イスラエルなどを訪問／滞在し、現地でジャーナリストの通訳なども務めた。

同大学院博士課程を単位修得退学し、国際交流基金中東専門員を経て、現在は大学非常勤講師。著書『<不在者>たちのイスラエル』(インパクト出版会)は、パレスチナ問題は占領を行っているイスラエルの側の問題であり、イスラエル社会のあり方もゆがめているという視点から、イスラエルの社会・文化を扱っている。